

事業名	没後30年記念 入江泰吉「万葉大和路とみほとけ」展				
主催	入江泰吉記念奈良市写真美術館				
文化振興計画項目	(2)芸術鑑賞等広く市民が文化に接する機会の拡充に関すること。				
目的	入江泰吉没後30年記念して企画。 入江が晩年精力的に取り組んできた「万葉集」と大和の仏像を紹介する写真展。				
重点対象	特に小中学生に鑑賞していただきたい写真展。美術と国語、双方からアプローチし、写真を見て楽しむだけでなく、様々な学びを得ることができる機会を提供する。				
目標値	来場者数	実績値 (入江作品展)	H29	R元	R2
	観覧者数 2,500人 (36日間/1日69人)		3,350人 (31日間/1日105人) 入江泰吉「菊池寛賞 受賞作品展」	2,470人 (68日間/1日36人) 入江泰吉「旅展」	1,879人 (31日間/1日60人) 入江泰吉「灯り展」
※令和3年度同時期は池改修工事のため臨時休館					
事業区分	企画事業(指定事業)	事業予算	収入		支出
			984千円		984千円
<p style="text-align: center;">概要 (実施方法、協力者や協働相手など)</p> <p>入江泰吉記念奈良市写真美術館では、奈良市出身の写真家・入江泰吉の写真展に加えて、現在国内外で活躍中の写真家の展示を行っている。入江関連展示とそれ以外の展示を同時開催することが多いが、本展については入江作品のみを扱ったものである。</p> <p>本展の企画・実施については館長と館学芸員とが議論、検討しながら行っており、入江泰吉の没後30年の節目で、これまでにない小・中学生(デジタルネイティブ世代)向けの新しい展覧会である。 新しい鑑賞体験として、メタバースを使用し、自宅等でホームページにアクセスし、仮想空間上で鑑賞の振り返りや予習が可能であること、写真作品と万葉集をセットで展示する構成とし美術と国語を双方からアプローチすることとしている。</p> <p>観覧料金は、一般500円、高校生・大学生200円(高校生のみ土曜日無料)、小中学生無料(本展覧会開催に際し、観覧料免除とした)、市在住70歳以上の方無料、障がい者手帳をお持ちの方等無料、団体(20名以上)2割引。</p>					
事業スケジュール(準備を含む)					
時期		内容			
令和4年4月		展覧会方針決定			
令和5年1月		展示作品選定			
令和5年2月6日～10日		展示作業			
令和5年2月11日～3月26日		展示			
事業費内訳(主な経費)					
内訳	金額	内訳	金額		
通信運搬費	40千円	委託費支出	300千円		
消耗品費	12千円				
印刷製本費	500千円				
諸謝金支出	132千円				

現状

本館は関西唯一の写真専門の美術館であり、入江泰吉氏は奈良を代表する写真家であると同時に、奈良を代表する文化人の一人でもある。志賀直哉や会津八一、白洲正子、司馬遼太郎らとの交流もあり、近代以降の奈良の文化を見て取る、または奈良を語る上でなくてはならない存在である。このことから氏の写真を展示することは単なる写真展以上の意義がある。

展覧会事業は文化振興計画にある「芸術鑑賞等広く市民が文化に接する機会の拡充に関すること」を推進するにあたって、核となる事業である。

年5回程度開催の企画展では、入江泰吉以外の写真家、現在活躍中の写真家による展示も行っている。今回の視察においては入江作品展のみの実施であるが、時期によっては「入江作品展」「他の写真家の作品展」が同時開催されている。

今日活躍している写真家の展示を行うことで、入江泰吉ファンや奈良ファン以外の人の来館も増えており、入江泰吉作品の馴染みにない若い写真愛好家にも鑑賞の機会を提供できている。また、昨今の写真家による作品を、入江作品とともに楽しむことができ、写真芸術の奥深さを感じてもらえていると考える。

今年度4月より大西洋新館長を迎え、メタバース・NFTを用いた新しい技術を使った発信の方法にも試み、デジタルの世界にも対応できる美術館としての取組を進めている。これまでに県内高校の写真部と連携し、メタバース上の写真美術館での展示事業を行い、若い世代の写真活動発表する場を創出するなど、デジタル化を手段とした新たな館運営をめざしている。

奈良市には写真美術館のほか、杉岡華邨書道美術館と奈良市美術館があり、奈良市民に多様なジャンルの美術作品を鑑賞できる機会を提供しているが、来館者数の減少がみられる施設もあり、各館の運営方針に基づいた様々な施策を展開していく必要がある。

課題

入江氏没後30年となり、若い世代に入江泰吉を伝え、残していくことの難しさを痛感している。入江作品を受け継いでいくには、奈良市内・県内にとどまらず全国ひいては世界にも魅力を発信していくことが求められる。

展示表現も多様化しており、従来の見せ方だけでは通用しなくなっている。基本の展示表現を土台としながら、常に新たな表現方法を模索しチャレンジする必要がある。

また、いずれの施設の事業においても、若い世代に来館してもらうことに苦労している。本展覧会も小・中学生へ美術館へ興味を持ち、来館の機会となることを期待しているが、広報面でのアプローチが課題である。

各館において地元小中学校と連携を試みてはいるが、学校の担当者の異動などにより継続されないケースもある。学校のカリキュラムのなかで美術鑑賞の機会を取り入れてもらうなど、市全体の取組として進める必要がある。

また過去の委員会でも指摘があったが、本館学芸員は入江泰吉旧居、奈良市美術館との兼務であることに加え、市美術館においては館長が設置されておらず、体制的な課題も抱えている。

本来、博物館・美術館においては展示だけが業務でなく、美術品の収集・保管・調査研究といった役割が課せられているが、財政難により十分な体制が取れていない。

また、企画・運営を担う人材育成も必要である。